徳川家康による古典籍の蒐集
――「富士見亭文庫」成立以前――

丸山裕美子

はじめに

日本古代史を研究していると、古代の基本史料の多くが、徳川家康による古典籍蒐集になんらかの形で関わっていることに気づく。その代表格は、現在名古屋市蓬左文庫に所蔵されている金沢文庫本『続日本紀』と、同じく金沢文庫本『侍中群要』であろう。両者はともに、いわゆる「駿河御譲本」であり、家康の死後、その九男であった尾張藩初代藩主徳川義直に譲られた、家康の蔵書であった。(1)

筆者らが最近、翻刻・紹介した『本草和名』も家康の蔵書であったと考えられる典籍の一つである。『本草和名』は、延喜末年頃（九二〇―九二三年頃）に、醍醐天皇の勅を受けて、深根輔仁が編纂した漢和薬名辞書である。『和名類聚抄』に先行して、和名を記す辞書であるが、十三世紀以来、長く存在が忘れられていた。これを江戸時代後期に幕府の紅葉山文庫で発見し、刊行したのは、幕府の医官多紀元簡であった。しかし実は、それ以前、慶長五年（一六〇〇）十二月四日に吉田意安（宗達）が「江戸御文庫医書」を抜書した抄出本が、台北・国立故宮博物院に所蔵されている。(2)

また、『出雲国風土記』の書写年代を明記する最古の写本は、慶長二年に細川幽斎が「江戸内府御本」を書写校合し

た細川家本である。[3]

ここで注目したいのは、『本草和名』抄出本に記される「江戸御文庫医書」、『出雲国風土記』細川家本奥書の「江戸内府御本」が、ともに慶長七年に江戸城本丸に設けられたいわゆる「富士見亭文庫」成立以前の家康の蔵書であるという点である。

徳川家康による古典籍の蒐集については、江戸時代後期、十九世紀初に幕府書物奉行近藤守重（一七七一―一八二九、通称重蔵、号は正斎、本稿では「近藤正斎」と表記する）が記した『右文故事』『好書故事』を嚆矢とする。[4]とりわけ文化十四年（一八一四）に正斎が幕府に献上した『右文故事』は、紅葉山文庫（富士見亭文庫の後身）の沿革とその蔵書についての詳細な考証で、家康の蔵書についてもその来歴を、林羅山（道春）による『御本日記』や、金地院（以心）崇伝の日記『本光国師日記』、あるいは『駿府記』『駿府政事録』『慶長年録』などを駆使して検証している。[5]

近代以降、家康の蔵書を含む幕府の文庫＝紅葉山文庫について、森潤三郎氏[6]や福井保氏[7]、川瀬一馬氏[8]による優れた研究が出たが、それも近藤正斎の記述に多くをよっている。また最近、藤實久美子・長沢孝三・臼井和樹・松田泰代氏らが、紅葉山文庫の蔵書について新たに検討を加えている。[9]しかしそこでの記述は、当然のことながら、家康の死後、寛永十六年（一六三九）に江戸城内の紅葉山に文庫が移されて以降、とくに書物奉行（寛永十年に設置）の記録『御書物方日記』が残される宝永三年（一七〇六）以後の検討が中心である。

夙に川瀬一馬氏が、家康による古典籍蒐集は、文禄四年（一五九五）豊臣秀次の死後に始まり、本格化するのは、関ヶ原の戦の後、慶長六年（一六〇一）以降であると指摘したこともあって、「富士見亭文庫」成立以前＝慶長六年以前の古典籍の蒐集については、これまでほとんど検討されてこなかった。それは、家康の蒐書についての記録として知られ、近藤正斎が多くをよった『御本日記』『本光国師日記』『駿府記』など幕府方の史料がいずれも慶長年間後半の記録を中心とするという史料的な制約があったことも大きい。そもそも享和三年（一八〇三）に編纂された紅葉山文庫の編年史「御文庫始末記」は、「御文庫ノ設ハ、東照宮、駿府ニ御在城ノ時（慶長十二年以降）ニ始ル」という。[10]

しかしながら、徳川家康による古典籍の蒐集は、慶長六年以降に始まったものでないことは、『本草和名』抄出本や細川家本『出雲国風土記』の例にも明らかである。本稿では、家康の蒐書の実態について、慶長六年以前に焦点をあて、とくに古代史料の蒐集の過程を、同時代の京都の公家の日記類、具体的には吉田兼見の『兼見卿記』、その弟神龍院梵舜の『舜旧記』、山科言経の『言経卿記』、その息子言緒の『言緒卿記』などから、明らかにしていきたい。[11]

一　徳川家康による古典籍蒐集についての概要

慶長六年（一六〇一）以前の家康の古典籍蒐集について論じる前に、先行研究によって明らかにされてきた、家康の古典籍蒐集と紅葉山文庫についての概要をまとめておく。

応仁よりこのかた百余年騒乱打つづき、天下の書籍ことごとく散佚せしを御嘆きありて、遍く古書を購求せしめらる。この時、諸家より献りしもの亦少なからず。菊亭右府晴季公よりは、金沢文庫に蔵せし律令を献ぜらる。こは武州金沢に在しを、関白秀次召取て蔵せられ、後に菊亭に贈られしを今献ぜしなり。日野前大納言輝資入道唯心は、おなじ古写本の侍中群要抄及び故実鈔、飛鳥井中納言雅庸卿はその家の系図、又歌道宗匠の日記、新歌仙。冷泉中納言為満卿は大比叡歌合を献ず。伊豆の般若院快運は続日本紀を献ぜしに、闕巻有しかば、五山の僧徒して補写せしめらる。金地院崇伝長老は甲州身延山に有し本朝文粋二部を取出して献りしに、第一の巻闕たりしを、道春（林羅山）京師にて探得て補写し、全備しかば御感心有り。又相国寺艮西堂は左氏伝二十冊、斉民要術十巻を奉り。圓光寺閑室が遺物として、その寺より黄氏日鈔三十冊を献じ、神龍院梵舜は武家御伝、皇代記、源氏系図等を捜索して献る。……【駿府記、慶長見聞録案紙】

（『徳川実紀』巻二二東照宮御実紀附録）

やや長く引用したが、徳川家康の古典籍蒐集にあたって、よく知られている『徳川実紀』の記述である。[12] 家康が、応仁の乱以来百年に及ぶ戦乱の時代に天下の書籍が散逸してしまったことを嘆き、古典籍を広く求め、あるいは購入し、

あるいは諸家より献上され、その膨大な蔵書を形成していったことが語られている。

この記事に見える古代の基本史料としては、金沢文庫本の『律令』は菊亭晴季から、同じく金沢文庫本の『侍中群要』は日野輝資から献上されたこと、そしてそれらの古典籍は、かつて関白藤原秀次が金沢文庫から「召取」たもので、秀次から菊亭・日野両人に贈られたものであることが記されている。また快運から『続日本紀』が献上されたが、闕巻があったので、五山僧らに補写させたこと、金地院崇伝から『本朝文粋』が献上され、その闕巻は林羅山が補ったこと、梵舜からは「源氏系図」などが献じられたことがわかる。

『駿府記』『慶長見聞録案紙』による記述であるが、『駿府記』以外の記録からもこれらのことについて徴することができる。一例として、『言経卿記』文禄二年（一五九三）四月十三日条をあげておこう。豊臣秀次が天皇に古典籍を献上したこと、その使者として菊亭晴季と日野輝資が遣わされたこと、また菊亭晴季と日野輝資にも古典籍が贈られたことが記されている。[13]

一、殿下（豊臣秀次）ヨリ、禁中へ御草子共被レ参了。菊亭右府・日野亜相等御使也。目六

日本紀　続日本紀　続日本後紀　文徳実録　日本後紀　三代実録　帝紀　百練抄　女院号　類聚三代格　令三十五巻

一、同菊亭ニ被レ遣之分

清獬抄　中獬略抄　日本続文粋　律令〈二トヲリ、不具〉　日本紀〈不具〉　有職色々

一、同日日野亜相ニ被レ遣分

日本紀〈不具〉　侍中群要　年中行事注一巻

このうちの菊亭分の『律令』と日野分の『侍中群要』が、ともに慶長十九年（一六一四）七月に駿府の家康に献上されたのである（『駿府記』同年七月二十八日条・二十九日条）。うち『侍中群要』は、現在蓬左文庫に所蔵されており、金沢文庫旧蔵本であることが明らかである。『律』（巻一名例上、巻七賊盗の二巻）、『令』（『令義解』七巻、『令集解』十

巻）については、現在、紅葉山文庫を引き継いだ国立公文書館（内閣文庫）に所蔵されているけれども、近藤正斎以来、金沢文庫本そのものではない忠実な臨模本であるとされている。[14]

さてここであらためて紅葉山文庫について、その蔵書の性格を確認しておこう。紅葉山文庫は、「紅葉山御文庫」「楓山文庫」とも記されるが、江戸時代には単に「御文庫」あるいは「御蔵」と呼ばれていた。先にも触れたように、「御文庫始末記」は、この文庫は、徳川家康が駿府に移って以後に設けられたとするが、近藤正斎『好書故事』は、家康が慶長七年（一六〇二）に、江戸城本丸に設けたいわゆる「富士見亭文庫」に始まるという。

慶長七年六月江戸御城ノ南、富士見ノ亭ニ御文庫ヲ建ラレ、廿四日金沢文庫ノ本其他ノ図書ヲ収儲セラル。是、江戸御文庫ノ始ナリ。

とある（『右文故事』、『徳川実紀』巻二二東照宮御実紀附録も同じ）。正斎は「金沢文庫の本・その他の図書」を収めたとし（『好書故事』所引『慶長年録』では「金沢文庫を御移被レ成」とある）、一般には家康が金沢文庫の蔵書を移して文庫を立てたと解されているが、[15]夙に小野則秋氏が指摘したように、これは解釈の誤りというべきで、金沢文庫旧蔵本を含む古典籍を蔵したとみるべきである。[16]

この富士見亭文庫には、文禄・慶長の役を契機として、朝鮮からもたらされた朝鮮版本や唐本の漢籍などが収蔵されたとされる。[17]その後、秀忠に将軍職を譲った家康は、慶長十二年に駿府城に入ったが、駿府の書庫には、富士見亭文庫にあった蔵書が運ばれた（駿河文庫）。駿河文庫の蔵書は、家康の死の前後に、江戸の将軍家と、尾張・紀伊・水戸の御三家に譲られた。将軍家に送られたものは（富士見亭文庫の蔵書とともに）、寛永十六年（一六三九）に江戸城内の紅葉山の麓に新築された書物蔵に移され、歴代の将軍、なかでも徳川吉宗の時に、蔵書を大きく増やした。明治維新後、その多くが内閣文庫の所蔵となり、一部は明治六年（一八七三）の火災で焼失したものの、現在は国立公文書館と宮内庁書陵部に所蔵されている。

紅葉山文庫の蔵書目録は、前掲の福井保氏の研究によれば、慶長七年以来、十回にわたり編纂されている。現存する

のは天保七年（一八三六）に完成した『重訂御書籍目録』と、慶応二年（一八六六）頃に編纂が終わった最後の目録『元治増補御書籍目録』である。そこには十万冊以上の蔵書を載せるが、うち幕府の編纂物を除くと、漢籍が八五％以上を占める。家康による古典籍蒐集においても、漢籍が主体であったことは間違いないが、一方で、日本古代・中世の古典籍、とくに法制書と歴史書について、家康がとくに関心を持っていたことは、『徳川実紀』巻二二東照宮御実紀附録にも、「和書にては、延喜式・東鑑（吾妻鏡）・建武式目などをいつも御覧ぜられ」とあることからも周知のところであろう。また後述する「慶長御写本」（本稿では以下「慶長写本」と表記する）と称される事業で書写されたのは、ほとんどが日本の古典籍であった。

朝鮮版本を含む漢籍の蒐集については、ひとまずおき、本稿では家康による日本の古典籍の蒐集について、文庫の所在と出版・書写事業によって、便宜、四つの時期に分けて考えてみたい。

Ⅰ　天正・文禄～慶長六年（一六〇一）　富士見亭文庫成立以前
Ⅱ　慶長七年～慶長十一年（一六〇七）　富士見亭文庫
Ⅲ　慶長十二年～慶長十八年（一六一四）　駿河文庫①
Ⅳ　慶長十九年～元和二年（一六一六）　駿河文庫②

Ⅰ期は、富士見亭文庫成立以前である。この間のことについては、先述のように川瀬一馬氏が文禄四年（一五九五）七月の豊臣秀次の死後に、家康の古典籍蒐集が始まったと推測している。また、いわゆる「伏見版」の版行事業が慶長四年から始まっている。「伏見版」の刊行は慶長十一年までつづいているから、その意味では、Ⅰ・Ⅱ期はそのまま一連の時期とみることもできよう。Ⅱ期は、富士見亭文庫が成立し、引き続き「伏見版」の刊行が行われていた時期、Ⅲ期は、家康が駿府城に移り、江戸の文庫の典籍を駿河に移した（「駿河文庫」）時期、Ⅳ期はいわゆる「慶長写本」及び「駿河版」の刊行が行われた時期である。家康による古典籍の蒐集に関しては、最後のⅣ期がもっとも盛んであり、かつ関連する史料も豊富に残っていて、具体的な実態がよくわかり、先行研究も多い。「はじめに」で述べたように、本

稿では、これまでほとんど検討されてこなかったⅠの時期について、京都の公家の日記によって検討するが、その前に、Ⅰ～Ⅳ期にわたる家康による出版（版行）事業と、書写事業についての概略を確認しておきたい。両者は家康の文化事業として、よく知られるところではあるが、その内容を確認することで、家康が古典籍に何を求めていたのか、どのような古典籍を重視していたのかがわかるからである。

二　徳川家康による古典籍の出版事業と書写事業――伏見版・駿河版と慶長写本――

徳川家康による古典籍の出版事業は、Ⅰ期、関ケ原の戦以前に構想されていた。朝鮮から伝わった活字印刷術の普及により、ようやく日本でも活字出版事業が本格的に展開し始める。家康の出版事業に関しては、川瀬一馬氏の研究にほぼ尽くされている。[18]「伏見版」と「駿河版」について、川瀬氏の研究によってまとめておきたい。

「伏見版」は、家康が、足利学校第九代庠主であった三要元佶に命じ、木版活字を与えて京都伏見で版行させたもので、慶長四年（一五九九）の『孔子家語』『六韜』『三略』を皮切りに、翌年には『貞観政要』を版行した。元佶は家康が慶長六年に伏見に建てた円光寺の住職となって事業を遂行したので、伏見版は円光寺版とも呼ばれる。慶長十一年の『武経七書』（『六韜』『三略』を含む）まで、八部八十冊が出版されている。日本の古典籍としては、慶長十年版行の『東鑑』＝『吾妻鏡』があるのみである。

「駿河版」は、家康が駿府に隠居した後、金地院崇伝・林羅山らに命じ、今度は銅活字を用いて刊行させたもので、慶長二十年（一六一五）に『大蔵一覧集』十一冊、翌元和二年には『群書治要』四十七冊を出版した。家康は『群書治要』完成を待たずに死去している。

以上、出版事業からは、家康が中国の古典（漢籍）、とくに『武経七書』などの兵法書＝武家の養成・教養に関わる古典と、『貞観政要』『群書治要』など為政者のための古典的政書を重んじ、その普及を図っていたことが知られる。唯

一の日本の古典籍『吾妻鏡』の出版は、武家政権の正統な歴史書であるという認識であろう。武家による統治の正統性を漢籍の知識と歴史によって裏打ちされた確実なものにしようとしたと考えられる。

一方、家康による古典籍の書写事業は、「伏見版」の刊行より遅れ、家康最晩年に始まった。慶長十九年（一六一四）に本格化したとされ、「慶長写本」の名で知られる。[19] このときにはまず、院や公家たちから広くその所蔵する古記録類の目録を求め、それらを提出させて、書写させた。

『本光国師日記』慶長十九年（一六一四）四月十六日条によると、家康の意向を受けて、金地院崇伝と本多正純が、明経博士舟橋秀賢宛に出した書状案は以下の通りである。

態以二飛脚一申入候。院御所様へ日本之記録共、文徳実録・三代実録・延喜儀式なと御座候哉。……貴殿御存知之通を御書付候而、可レ有二御進上一由被二仰出一候。摂家・諸公家・御門跡方にも、何様之記録御座候哉。……

これを受けて、舟橋秀賢からは、二十八日に返書があり、「記録共有之覚」が報告されている。

□（院ヵ）御所様に　延喜式　百練抄　令　江次第
　此外、関白秀次公進上ノ記録共之内、実録之抜書御座候つる様ニ覚申候。
九条殿に　新儀式　北山抄　一類聚格
官務に　西宮抄　一類聚国史

とある。後陽成上皇のもとに、『延喜式』『百練抄』『令』『江家次第』が、九条家には『新儀式』『北山抄』『類聚三代格』が、官務家（壬生家）には『西宮記』と『類聚国史』があるというのである。六月には、菊亭家に金沢文庫本の『律令』が、三条家に『三代実録』が、広橋家に『文徳実録』があることが報告されている（『本光国師日記』同年六月二十四日条）。

十月に入ると、京都五山の僧侶のうち、能書のものを各寺十人ずつ計五十人選んで、南禅寺金地院で書写事業にあたらせた（『本光国師日記』同年十月二十四日条、『駿府記』同月二十七日条など）。十一月には、『日本後紀』『弘仁格

式』『貞観格式』『類聚国史』『類聚三代格』が後陽成上皇のもとにあるかどうかを問い合わせてこれを書写し、十二月には『古事記』『続日本紀』以下書写した一部を献上している。翌年三月に、三二部五三七冊の書写が完了し、これらの新写本は長櫃三棹（三十箱）に納められ、三月二十八日に京都を発って駿府に向かい、四月二日、駿府の家康のもとに届けられた（『本光国師日記』）。

さて、注目すべきは、そのほとんどが日本の古典籍――とくに古代史料――であったということである（例外は「百録」＝『李嶠百詠』のみ）。歴史書と法制書、儀式書、公家の日記類を中心とする。『御本日記』や『好書故事』の「慶長採訪書目」によると、新写本として、以下の古典籍があげられている。

・梵舜本『先代旧事紀』五冊、『古事記』三冊、『釈日本紀』二十九冊
・冷泉家本『明月記』六十三冊
・三条家本『三代実録』二十冊、『続日本後紀』十冊
・広橋家本『文徳実録』五冊
・壬生家本『西宮記』二十二冊、『内裏式』二冊
・九条家本『山槐記』十五冊、『北山抄』五冊、『新儀式』一冊
・五条家本『菅家文草』七冊
・後陽成院本『日本紀略』十九冊、『類聚国史』二冊＋二十二冊、『類聚三代格』六冊、『姓氏録』一冊、『朝野群載』十九冊、『革命勘文』七冊、『懐風藻』一冊、『経国集』六冊。『都氏文集』三冊、『雑言奉和』一冊、『江吏部集』二冊、『江談抄』二冊、『文華秀麗集』一冊、『百録（李嶠百詠）』二冊
・本国寺本『聖徳太子伝暦』二冊
・二条家本『江家次第』二十冊、『日次記』二百二十冊＋十冊
・要法寺本『扶桑略記』六冊

これらはすべて古代（一部は中世にかかるが）の史料である。その他、『律』二巻、『令』十七巻（うち『令集解』十巻）、『本朝続文粋』二十三巻、『本朝文粋』十三冊、『続日本紀』二十冊、『公卿補任』一箱、『延喜式』四十九冊の所持あるいは書写が知られる。また『日本後紀』『新国史』『弘仁格式』『貞観格式』『延喜格』『延喜儀式』『政事要略』『法曹類林』『本朝月令』『除目抄』『李部王記』『百練抄』などを院御所（後陽成院）より借りているし、さらに『本草和名』『出雲国風土記』『豊後国風土記』『常陸国風土記』『源氏物語』、諸系図などの書写も確認できる。また当時一般に流布していたものは、当然所持していたであろう。

『御堂関白記』など近衛家の蔵書を借りることはできなかったようであるが、こうしてみると、古代の史料は、そのほとんどが徳川家康のもとに集積されていたといってよい。

「慶長写本」は、それぞれ三部書写され、江戸城の「御文庫」、駿府の「御文庫」の他、天皇家にも献上された。このことからは、家康が日本の古代史料、とくに歴史書と法制書を重視したこと、そして、それらを継承し、保存し、後世に伝えていくことへの強い意思が感じられる。

家康が古典籍の書写事業を始めた慶長十九年四月に先立つ三月、『本光国師日記』によると、家康には法度制定の計画があった（『本光国師日記』同月二十六日条）。

『駿府記』慶長十九年四月五日条にも、

> 群書治要、貞観政要、続日本紀、延喜式、御前より出し、五山衆に、公家法度たるべきのところ、書き抜かしむべきの旨仰せ出さる。金地院崇伝、道春（林羅山）これを承る。

とあり、この抜書は同月十三日に家康の御前に届けられ、金地院崇伝と林羅山がこれを家康に購読している（『駿府記』）。翌慶長二十年に発布された「武家諸法度」や「禁中并公家諸法度」が、こうした家康の出版・書写事業の影響を受けていることは明らかである。[20]

家康は、中国の古典籍、とくに兵法書や政書については、最新の技術をもって版行して武家の教養を高め、武家政権

の正統な歴史書としての『吾妻鏡』を出版してその普及を図った。一方で、日本の古典籍については、主に日本古代の歴史書と法制書、儀式書を蒐集、書写して、自らの幕府の法整備に応用したということが確認できるのである。

三　慶長六年以前の家康の古典籍蒐集

慶長六年以前の家康の古典籍蒐集について、家康と親交のあった同時代京都の公家の日記から、関連するところを表にまとめてみた。日記の記主について、簡略に紹介しておこう。

『兼見卿記』の記主吉田兼見（一五三五―一六一〇）は、吉田家――吉田神道の宗家、神祇管領長上――の当主で、吉田兼右の子、清原宣賢の孫にあたる。文禄元年（一五九二）には家督を息子に譲っているが、同四年・五年には後陽成天皇に『日本書紀』などを講じるなど、神道と日本の古典籍に造詣が深かった。慶長二年には従二位に昇っている。

兼見の弟が神龍院梵舜（一五五三―一六三二）である。その日記は『舜旧記』という。兄兼見とともに、秀吉を祀る豊国神社を創建し、その神宮寺別当となって、経営に尽力した。日本の古典籍の書写・校合でも知られる。また家康に神道を教授した。

『言経卿記』の記主山科言経（一五四三―一六一一）は、山科家――藤原北家四条流、内蔵頭を世襲し、装束の調進を家職とする、家格は権中納言を極官とする羽林家――の当主であったが、天正十三年（一五八五）六月、権中納言のときに、冷泉為満（冷泉為益の子、上冷泉家当主、一五五九―一六一九）、四条隆昌（冷泉為益の子、四条家当主、一五五六―一六一三）とともに、正親町天皇の勅勘を蒙った。妻（冷泉為益の娘、四条隆昌・冷泉為満とは兄妹）の姉が興正寺顕尊（佐超、本願寺顕如の子）の妻であった関係で、本願寺に身を寄せた。天正十九年に大村由己（梅庵）の斡旋で家康に面談して、その豊かな学識をもって信頼を得て、扶持を与えられ、有職や衣紋・装束のことなどに奉仕した。医学・薬学に造詣が深く、その点でも家康と通じるところがあったと思われる。家康のもとには、冷泉為満ととも

に行くことが多く、[21]また他の公家たちと家康との仲介も行っている。言経は、家康のとりなしによって、慶長三年に勅勘を解かれ、朝廷に復帰した。関ケ原の戦の後には、家康から内裏北に家を賜ってもいる。言経の嫡男が山科言緒（一五七七－一六二〇）で、その日記が『言緒卿記』である。

さて、表によると、吉田兼見は天正十四年（一五八六）十一月六日、勧修寺晴豊のもとで徳川家康と面談しており、その際、家康から「神道之儀端々」を尋ねられたという。おそらく、この頃から、家康は本格的に京都の公家衆の有職知識などを吸収しようとし始めたのではないかと推測される。この年、家康は豊臣秀吉と和睦し、その妹朝日姫と婚姻、従三位参議に任じられている。十月に上洛し、兼見と面談した前日、十一月五日に正三位中納言に任じられ、八日には京都を発っている。[22]

吉田兼見には、文禄三年（一五九四）にも、囲碁をしつつ「神道端々色々不審」について、尋ねており、家康の関心が「神道」にあり、自らの疑問点について、神道家である兼見から直接回答を得ようとしていたことがうかがえる。兼見とその弟梵舜からは、『日本書紀』や「吉田家系図」「中原家系図」を得ており、また兼見は家康から『延喜式』を「是非可レ被レ写之由」を承っている。

山科言経は、先述のように、勅勘を蒙って蟄居中の天正十九年（一五九一）二月三十日、大村由己の斡旋で家康にはじめて面談している。大村由己（？－一五九六、号は梅安）はその優れた文才により、豊臣秀吉の御伽衆となった人物で、当代一流の文化人との交際で知られていた。言経は、この最初の面談の際に、手土産として、『公事根源抄』と三條西実隆の三首懐紙を持参しており、家康の求めるものをよく理解していた（大村由己の勧めがあったのかもしれない）。家康は、その五日後には、さっそく言経に『拾芥抄』上中下巻と、『名目抄』の書写を求め、料紙を支給している。

山科言経は、家康のために『拾芥抄』三冊を書写、校合し、翌文禄元年二月に家康に献上している。以後、言経は京都や伏見に滞在中の家康のもとをしばしば訪れ、食事に預かり、親しく雑談している。また「貞任追討之絵二巻」（「前

表　徳川家康の古典籍蒐集関連年表（慶長六年まで）

和暦	西暦	年齢	記事	出典（注）	備考
天正14	1586	45	11／8　……昨日六日、徳川へ申礼畢。勧亜相（勧修寺晴豊）ニ於テ対面畢。杉原十帖・緞子一巻遣之。暫雑談。神道之儀端々相尋之畢。今朝徳川帰国云々。	兼見	11／5　家康、権中納言 11／7　正親町天皇譲位、後陽成天皇即位
天正19	1591	50	2／26　……次入夜梅庵（大村由己）へ罷向了。家康卿之事直談之由被申。祝着了。	言経	天正15年　家康、権大納言 天正18年　家康、江戸に移る
			2／30　武蔵亜相家康卿、（大村）由己同道対顔了。公事根源抄・逍遥院（三條西実隆）三首懐紙等遣了。飡有之。大勢相伴了。	言経	
			3／5　江戸大納言殿（家康）へ罷向了。種々雑談了。拾芥抄上中下・名目抄等御所望之間、可書進之由申入之処ニ、料紙一束給了。夕飡有之。又御子息侍従殿（秀忠）御礼申入了。	言経	3／7　家康、山科言経に扶持を約束する 3／11　家康、江戸に下る
			3／11　備前守（多忠季）所へ罷向了。留守之間、女房ニ料紙打之事申置了。江戸大納言殿（家康）拾芥抄料紙也。三百十五丁也。水打也。	言経	
			10／17　江戸大納言殿（家康）御誂拾芥抄三冊出来了。乍去朱墨点まて可馳筆也。	言経	
			11／4　江戸亜相（家康）ヨリ誂之拾芥抄全部三冊、校合まて出来了。	言経	
文禄1	1592	51	2／25　江戸大納言へ罷向了。拾芥抄上中下書之進了。対顔了。雑談了。梅庵同道了。	言経	
			3／5　江戸大納言殿へ罷向、酒有之。次貞任追討之絵（「前九年合戦絵巻」）二巻読之。碁有之。種々雑談了。夕飡已後幸若三人罷向、舞・新曲夜討曽我等有之。戌刻ニ帰了。	言経	
文禄2	1593	52			藤原惺窩、江戸において家康に謁し、『貞観政要』を講ず（林羅山「惺窩先生行状」）。

文禄3	1594	53	4／2　家康、幽斎へ御出、……山科黄門（言経）同道、其外地下人・囲碁うち被召具了。……碁之中神道端々色々不審、多分令返答訖。……	兼見
			5／2　江戸亜相（家康）へ礼ニ罷向了。種々雑談了。竹内系図書之進了。織田一流系図令見之。	言経
			5／4　家康来已前、幽斎・柳原（淳光）来、至門外罷出了。……碁うち各来。古田織部、百疋持来。……日本紀・当家系図見之。感之。終日機嫌也。及暮帰京了。	兼見（言経）
			5／28　江戸亜相へ罷向。碁見物了。吾妻鏡少々読之。	言経
			6／19　江戸亜相昨夕伏見ヨリ上洛也云々、則罷向。目薬一貝遣了。先代北条系図書之遣了。	言経
			9／20　江戸亜相へ八時分ニ罷向了。冷（冷泉為満）・梅庵（大村由己）同道了。……次奥ノ座敷亜相・予・冷泉・梅庵等ニテ冷家伝三代集〈定家卿筆〉披見了。奇特被感了。三代集ニ付而、後土御門院・後柏原院・後奈良院等　勅書共則同披見了。又為家卿ヨリ三通書状、譲状也。同披見了。又僧正遍照家集〈定家卿筆〉、亜相へ被進了。事外祝着也。冷可相抱之由直談也。	言経
			一　梅庵ヨリ文献通考可見之由有之間、則令見之。三冊渡之。以上百四十冊有之。	
			10／3　伏見旅宿へ妙寿院（藤原惺窩）被来了。……妙寿院へ書状対談シテ遣了。（大村）由己ヨリ文献通考ニ付而之儀也。亜相へ可有感得否之事也。	言経
			10／12　梅庵（大村由己）ヨリ書状有之。江戸亜相書籍（『文献通考』）被見、則被止置之間、銀子事妙寿院マテ、予書状可遣之由有之間遣了。予取次分也。	言経
			10／15　旅宿へ梅庵法印被来了。草子共亜相へ可懸御目之由有之。目六有之。治平要覧百五十冊、此内三冊不足。又タウ伝・性理群書・李白	言経

		詩・資治通鑑等也。……		
文禄4	1595	10／29　梅庵ヨリ書物之事付而、江戸亜相内加々爪勝六等二人へ書状、予・妙寿院等シテ可遣由有之間、則判ヲ書之遣了。	言経	
		4／29　江戸亜相ヨリ家之系図御所望之間同心了。一巻アリト云トモ、朱之引様悪之間、（大草）月斎二相教了。可穿鑿之由有之。	言経	7／15　豊臣秀次、死去
	54	9／25　月斎ヨリ明日吉田（兼見）預ヘ江戸亜相御出之間、可罷向之由有之間、飛脚有之。又亜相家系図可持来之由有之。内々御誂也云々。	言経	
		9／26　江戸亜相ヘ家系図見セ申了。御コノミ有之。吉田諸系図ニテ校合了重而可清書之由有之。		
		吉田ニ源氏系図一巻借用了。	言経	
		細川幽斎ニ年中行事歌合借用了。		
		9／26　（吉田兼見、家康・幽斎・浅野長吉・柳原淳光・山科言経らと終日囲碁）山科（言経）源家系図一冊借用之。令許借了。	兼見	
		10／1　伏見ヘ冷泉（為満）同道罷向、……江戸亜相ヘ罷向。水無瀬黄門（兼成）伊勢物語講尺之内也。則聴聞了。……	言経	
		12／1　（細川）幽斎ヨリ書状有之。冷（冷泉為満）ヘ風土記借用。豊後国分一冊借被遣了。	言経	
慶長1	1596	5／10　……次内府（家康）ヘ罷向対顔了。中庸抄二冊懸御目了。祝着也。……	言経	5／8　家康、内大臣
	55	5／13　江戸内府ヘ罷向、一昨夜陣宣下雑談有之。宣旨・位記等披見了。……	言経	
		7／29　……江戸内府ヘ罷向了。対顔了。吾妻鏡読了。……	言経	
		4／26　……内府（家康）江中原家之系図書写持参了。……	梵舜	
慶長2	1597	5／7　内府家康御出。……延喜式等御覧之。是非可被写之由、承了。	兼見	
	56	6／1　栄任ヘ罷向了。伏見ヘ行也云々。豊後国風土記取ニ帰了。内府	言経	

				ヨリ冷（冷泉為満）へ御帰（返）了。	
				6／16　……次内府へ罷向。冷（冷泉為満）ヨリ常陸国風土記被借進了。則読之。……	言経
				10／7　江戸内府へ罷向了。……蘭奢待二色進之。一色八　後奈良院ヨリ　正親町院ヨリ拝領之分所望之間、進之。悦喜之由有之。……	言経
				7／13　伏見内府家康見舞罷。糒十袋、進物申也。……又家康系図下書来也。……	梵舜
				7／27　江戸内府へ冷（冷泉為満）被行了。対顔也云々。草子事相済了。	言経
				8／7　江戸内府へ冷被行了。対顔也云々。内府ヨリ公武大躰略記作者又一覧スヘキ由承了。……	言経
				8／11　江戸内府へ冷同道へ罷向了。……対顔暫令雑談了。公武大躰略記進了。先日御尋之間、持参申入了。	言経
				12／24　伏見へ罷向了。（冷泉・四条と同道、二人は先に帰宅、大勢相伴の夕飡の後多くは帰宅）次種々雑談了。東鏡読之。次舞満仲、一番有之、幸若也。……	言経
			1599	4／28　伏見城江戸内府ヨリ冷（冷泉為満）ニ可被来由有之間、俄ニ被罷向了。草子事談合也云々。……	言経
				10／11　内府へ倉部（山科言緒）同道罷向了。夕飡有之。内府・予（山科言経）・冷（冷泉爲満）・倉部・一斎（水無瀬）・兌長老（西笑承兌）・三要（閑室元佶）等也。色々草子・文字・絵等有之。今夜散々衆召具也。次　禁中北ニテ予・冷ニ家可給由御約束也。満足満足。	言経
				1／15　内府へ罷向。……予（山科言緒）八夜癸［亥］刻マテ御雑談。定家卿ノ手跡共披見仕候。其刻、冷泉殿（為満）詠哥大概之序講談有之。	言緒
				6／4　伏見内府御見廻（舞）越、武家御伝一冊令持参了。	梵舜

（注）出典は以下の略称を用いる：『兼見卿記』＝兼見、『言経卿記』＝言経、『舜旧記』＝梵舜、『言緒卿記』＝言緒

8／13　豊臣秀吉、死去

11／3　家康のとりなしにより、言経の勅勘赦さる

5月　『孔子家語』『三略』『六韜』開版（〔伏見版〕）

2月　『貞観政要』開版（〔伏見版〕）

9／15　関ケ原の戦

山科・冷泉、家を内裏北に賜る

九年合戦絵巻」）や『吾妻鏡』を講じていることも注目される。「竹内系図」「先代北条系図」を書いて進上しているが、家康の家系図についても、「朱之引様」がよろしくないというので、吉田兼見から吉田諸系図や源氏系図を借りて、校合し、清書するように指示されている。家康の信頼の厚さがうかがえる。

義弟にあたる冷泉為満を家康に紹介し、彼も家康のお抱えになるのだが、文禄三年（一五九四）の最初の面談の際には、藤原定家筆の『冷泉伝三代集』や冷泉為家の書状などを家康に披見して、感動させているし、定家筆の『僧正遍照家集』を家康に献上し、「事外祝着」と喜ばれている。家康は、『吾妻鏡』だけでなく、水無瀬兼成による『伊勢物語』の講釈なども受けており、公家の文化や和歌、古筆にも関心があったことが知られる。

また、言経は、細川幽斎（藤孝、一五三四－一六一〇）を経由した依頼を受け、文禄四年十二月に冷泉為満所蔵の『豊後国風土記』を家康のために借り出している。この『豊後国風土記』は、慶長二年（一五九七）六月になって、家康から冷泉為満に直接返却されている（冷泉家時雨亭文庫所蔵）。その後すぐに同じく冷泉為満所蔵の『常陸国風土記』を借り出している。細川幽斎が『出雲国風土記』を家康所蔵本から書写したのも、慶長二年であることを考えると、家康は慶長二年前後に三種の古代の「風土記」を書写・所持していたことになる。

以上、これまでほとんど検討されてこなかった、慶長六年以前の徳川家康の古典籍蒐集について、公家の日記から明らかになったところを指摘した。神道家の吉田兼見・梵舜からは神道について、また『日本書紀』や諸系図についての知識を得、有職・儀式・文学に詳しく、古典籍を所蔵する山科言経・冷泉為満らからは、有職故実に関する『拾芥抄』などの古典籍、諸系図、定家筆の家集、そして「風土記」を借りたり、献上されたり、書写して入手している。

ここで注意しておきたいのは、こうした家康の古典籍蒐集が、強制的な接収とは異なるという点である。公家らは、家康の扶持を得るためにあるいは秘蔵の古典籍を献上し、あるいは書写して進上しているが、いずれも依頼を受けてのことで、『拾芥抄』書写の例でもわかるように、料紙まで支給されている。また冷泉家の『豊後国風土記』についてはきちんと返却しており、借りている間に書写したということであろう。

豊臣秀次が奥州討伐の帰路に接収して京都に持ち帰った足利学校の聖像図や『五経注疏』などの貴重な古典籍を、秀次の失脚後に、家康が足利学校に返却したという逸話（『徳川実紀』巻二二東照宮御実紀附録）は、家康の古典籍保護の側面を物語るが、公家の日記からうかがえる家康の古典籍蒐集もまた、所蔵者を尊重しつつ、彼らの信頼も得て、所蔵の諸本を借り、書写するという態度であったことが確認されるのである。

おわりに

徳川家康が蒐集・書写した古典籍は、元和二年（一六一六）の家康の死後、一部は江戸の将軍家に送られ、残りは尾張・紀伊・水戸のいわゆる御三家に分譲された。江戸の将軍家に送られたのは、『羅山外集』によれば、「世にまれなる物」であり、『寛政重修諸家譜』林信勝（羅山）の記述によれば「本朝の旧記、及び希世の書」であった。この五十一部一一〇〇余冊、一一九軸は「駿河御文庫本」と呼ばれ、家康存命中の慶長十八年に将軍秀忠に譲られた三十部四九一冊の朝鮮本（うち二部は明版）の方を「駿河御譲本」と称して区別している。「駿河御文庫本」は、「慶長写本」と金沢文庫本などを中心としている。御三家の方の「駿河御譲本」は、尾張（九男・義直）・紀伊（十男・頼宣）・水戸（十一男・頼房）に五・五・三の比率で譲られたとされる（『羅山外集』）が、現在、紀伊徳川家に譲られたものはほとんどが散逸し、水戸徳川家に譲られたものは他の蔵書に紛れていたり空襲で焼失したりして、全容は不明である。尾張徳川家に譲られたものについては、約三分の一が幕末・明治初年に払い出されて失われたが、今もなおその三分の二を残し、蓬左文庫で大切に保管収蔵されている。

蓬左文庫の「駿河御譲本」は、目録が残っていることでも貴重である。川瀬一馬氏によって発見されたその目録には、

右、

部数合三百六十三部

冊数合弐千八百廿六冊
已上駿府御分物之御書籍也
元和三〈丁巳〉年正月七日請取之了

とある。[23] このうちに、確実に「金沢文庫本」といえるのは（「金沢文庫」の蔵書印の押されているもの）、『続日本紀』『侍中群要』『斉民要術』と『太平聖恵方』の四点である。[24] このうち、『侍中群要』は先述したように、慶長十九年七月二十九日に日野輝資から献上されたものであり、『斉民要術』は、慶長十七年四月二十六日に相国寺艮西堂＝承艮から『春秋左氏伝』とともに献上されたもので（『駿府記』）、おそらく西笑承兌（一五四八－一六〇七、家康の外交・法律関係の顧問的存在）の旧蔵書であろう。そして『続日本紀』は、慶長十七年三月十日に伊豆山般若院快運が献上したものである。『太平聖恵方』の家康への伝来過程は不明であるが、少なくとも蓬左文庫所蔵の「駿河御譲本」のうちの「金沢文庫本」四点のうち三点については、徳川家康が直接金沢文庫から蒐集したものではない。

本稿で明らかにした、「富士見亭文庫」成立以前＝慶長六年以前の家康の古典籍蒐集の具体的な姿からも、家康が金沢文庫を江戸城内に移したわけではなく、所蔵する「金沢文庫本」は、慶長年間後半に他の人びとから献上されたものであったと考えた方がよい。また慶長七年以後、慶長十九年より前の家康の古典籍蒐集についても、公家の日記の検討から、より具体的な様相が明らかになるのではないかと考える。これらについては、今後の課題である。

註

（1）駿河御譲本については、川瀬一馬「駿河御譲本の研究」（『日本書誌学之研究』講談社、一九七一年、初出一九三四年）に詳細な検討があり、概要はほぼつくされている。

（2）丸山裕美子・武倩『本草和名―影印・翻刻と研究―』（汲古書院、二〇二一年）四〇〇～四〇四頁。台北・国立故宮博物院には「慶長五年博愛堂鈔本」の名で所蔵されている（故観一三一二九）。吉田宗達（一五八四－一六二二、通称は父と同じく意安、号は如見）

は、吉田宗恂（通称意安、角倉了以の弟）の子で、父の宗恂とともに医師として家康に仕え、その本草研究の顧問的役割を勤めた（京都府医師会編『京都の医学史』思文閣出版、一九八〇年、など）。

（3）『出雲国風土記』写本についての最近の研究として、高橋周「近世前期における『出雲国風土記』写本の系譜―細川家本と出雲図書館本―」（島根県古代文化センター『古代文化研究』二八、二〇二〇年）をあげておく。

（4）『右文故事』は『近藤正斎全集』二（国書刊行会、一九七六年復刻）、『好書故事』は『近藤正斎全集』三（同上）に所収。また『大日本史料』十二編之二十四には『右文故事』の「御本日記附注」や関連する史料が多く収載されており、至便である。近藤正斎は、蝦夷地及び樺太・千島列島を探索し、択捉島に「大日本恵土呂府」の木標を立てたことで著名だが、文化五年（一八〇八）から文政二年（一八一九）まで幕府の書物方奉行を勤め、紅葉山文庫の蔵書を渉猟し、『右文故事』『好書故事』『正斎書籍考』などを著した。自身も古典籍を蒐集し、金沢文庫の再興を企図していたとされる。近藤正斎はまた紅葉山文庫の蔵書目録『重訂御書籍目録』を編纂しているが、その附録『御書籍来歴志』は蔵書の伝来を記して貴重である。紅葉山文庫の蔵書目録は、最後の目録である『元治増補御書籍目録』が小川武彦・金井康編『徳川幕府蔵書目』一～七（ゆまに書房、書誌・書目シリーズ17のうち）に影印出版されており、このときの「来歴志」が所収されている。

（5）『御本日記』は元和二年（一六一六）十一月八日付で林羅山が記した家康の遺贈書目録である。近藤正斎による「御本日記附註」が『右文故事』に収録されて残り、正斎によって、家康が亡くなった際の蔵書の由来が考証されている。なお林羅山が家康に仕えたのは慶長十年（一六〇五）以降である。金地院崇伝の『本光国師日記』は、慶長十五年以降の記録であり、『駿府記』も慶長十六年以降の記録である。『駿府記』とほぼ内容が同じ『駿府政事録』も同様で、『慶長年録』も現存するのは慶長十四年以降である。つまり、家康最晩年の古典籍蒐集についてはよくわかるが、慶長前半までのことはほとんどわからないのである。

（6）森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』（昭和書房、一九三四年）。

（7）福井保『内閣文庫書誌の研究』（青裳堂書店、一九八〇年）。同『紅葉山文庫』（郷学舎、一九八〇年）も参照。

（8）川瀬氏註(1)書。同『日本における書籍蒐蔵の歴史』（ぺりかん社、一九九九年）も参照。

（9）藤實久美子「紅葉山文庫の管理と書物師出雲寺家」（『近世書籍文化論―史料論的アプローチ』吉川弘文館、二〇〇六年）、長沢孝三『幕府のふみくら』（吉川弘文館、二〇一二年）、臼井和樹「図書寮蔵紅葉山御文庫本目録」(1)～(4)（『書陵部紀要』六八～七〇、七二、二〇一六～一八年、二〇二〇年）、松田泰代『徳川日本のナショナル・ライブラリー』（臨川書店、二〇一八年）。宝永三年（一七

○六）から安政四年（一八五七）までの幕府の書物奉行の日記は、内閣文庫（国立公文書館）に現存し、東京大学史料編纂所から『大日本近世史料　幕府書物方日記』として刊行中である（未完）

(10) 「御文庫始末記」は『大日本近世史料　幕府書物方日記』三の巻末に所収されている。なお近藤正斎『右文故事』の「御代々文事表」（幕府の代々の将軍の文事を年表にまとめたもの）は、文禄二年から始まる。文禄二年十二月に、藤原惺窩を御前に召して『貞観政要』を講させたことが、家康の「文事」の始まりとされているのである。『右文故事』九には、「是（文禄二年）ヨリ前ニ書籍ノ記録ニ見エシモノ」として、永禄五年（一五六二、家康二十一歳）二月に「源家相伝ノ軍書四十八冊」を書写させたことのみをあげており、また文禄二年以後のこととして、慶長三年（一五九八）十二月に『礼記正義』を清原秀賢に貸したことがその跋文に見えることをあげる。後者について、近藤正斎は、「是御蔵書ノ事見エシ始ナリ」とする。

(11) 『兼見卿記』『舜旧記』は史料纂集本、『言経卿記』『言緒卿記』は大日本古記録本を使用した。なお明経博士舟橋秀賢（一五七五―一六一四）の日記『慶長日件録』のこの時期の記録が残っていれば、もう少し関係史料を追加することができたかもしれない。

(12) 『徳川実紀』は新訂増補国史大系本を使用した。十九世紀前半の編纂・成立ではあるが、幕府の記録や、『駿府記』や『本光国師日記』など家康同時代の史料を根拠としており、一定の信憑性は認められる。

(13) 『言経卿記』によると、これに先立ち、山科言経は文禄二年二月二十四日に秀次蔵書の管理を命じられ、三月十二日には『令集解』の検知を行い、四月九日には蔵書を検知し、表具を整え、目録が作成されている。

(14) 紅葉山文庫本『律』『令義解』『令集解』については、石上英一「『令集解』金沢文庫本の再検討」「『令義解』金沢文庫本の成立」（『日本古代史料学』東京大学出版会、一九九七年）を参照。ただし石上氏は、金沢文庫本の原本が幕府に献上された可能性（その後、寛永十三年（一六三六）に後水尾院への献上の際に複本が作られ、原本は後水尾院に贈られたとみる）も残している。他に水本浩典『律令註釈書の系統的研究』（塙書房、一九九一年）も参照。

(15) 関靖『金沢文庫の研究』（大日本雄弁会講談社、一九五一年）三九一～三九三頁など。

(16) 小野則秋「徳川家康の文献政策とその影響」（『日本文庫史研究』下、臨川書店、一九八八年、初出一九七三年）。

(17) 藤本幸夫「印刷文化の比較史」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅳ　文化と技術』東京大学出版会、一九九三年）など。

(18) 川瀬一馬『増補　古活字版之研究』上（日本古書籍商協会、一九六七年）第二編第三節「徳川家康の開版事業」。

(19) 慶長写本における古代史料については、高田義人「『朝野郡載』写本系統についての試論―慶長写本・東山御文庫本・三条西本・葉室本を中心として―」(『書陵部紀要』五四、二〇〇二年) などを参照。

(20) 吉田洋子「江戸時代における朝廷の存在形態と役割―『禁中并公家中諸法度』―」(『日本史研究』四九五、二〇〇三年) を参照。

(21) 冷泉為満と家康との関係については、高橋利郎「新出の模写本「熊野懐紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」と徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について」(『大東書道研究』二四、二〇一七年) を参照のこと。

(22) 藤井譲治「徳川家康の叙位任官」(『史林』一〇一―四、二〇一八年) による。なお同『徳川家康』(吉川弘文館 (人物叢書)、二〇二〇年) は、本稿を成すにあたり、全般に参照した。

(23) 川瀬氏註(1)書、及び名古屋市鶴舞図書館『蓬左文庫駿河御譲本目録』(名古屋市鶴舞図書館、一九六二年) も参照。なお蓬左文庫の蔵書目録は、「駿河御譲本」の目録を含む『御書籍目録 (寛永目録)』以下、歴代の目録が蓬左文庫に現存し、その影印が名古屋市蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』全十巻 (ゆまに書房、書誌・書目シリーズ49) として刊行されている。

(24) この他、室町末期書写の『春秋公羊疏』に「金沢文庫」の墨書があるが、これは金沢文庫本の北宋版本を書写したものである (杉浦豊治『蓬左文庫典籍叢録　駿河御譲本』金城学院大学、一九七九年)。

【付記】本稿は、二〇二一年度日本私立学校職員・共済事業団学術研究振興資金の助成によって開催された、蓬左文庫典籍研究会シンポジウム「江戸幕府の書物と蓬左文庫」(名古屋市博物館) における報告「徳川家康の典籍蒐集―古代史料を中心に―」を論文化したものである。今年度で退職される大塚英二先生 (日本近世史) に、謹んで献呈いたします。